

# 知的障害者への生涯学習支援「杜のまなびや」における実践上の課題

— 講師とスタッフへのインタビューを通して —

藤村 励子<sup>1</sup>・平野 碧<sup>1</sup>・大黒 空<sup>2</sup>・高橋 侑果<sup>3</sup>・  
内田 雄樹<sup>3</sup>・吉田 広人<sup>3</sup>・八島 猛<sup>1,4</sup>・野口 和人<sup>1</sup>

<sup>1</sup> 東北大学大学院教育学研究科

<sup>2</sup> 東北大学教育学部研究生

<sup>3</sup> 東北大学教育学部

<sup>4</sup> 上越教育大学大学院学校教育研究科

## 要約

本研究では、生涯学習支援事業「杜のまなびや」における実践上の課題を明らかにするために、担当講師と運営スタッフを対象とした半構造化面接を行った。その結果、①講義内容の選定、②外部講師への依頼、③参加者の情報不足、④講師との情報共有不足、⑤当日の講義の流れ、⑥講義資料、⑦実践当日の支援、⑧ボランティアの不足といった8つの課題が明らかとなった。今後実践を行う際には、参加者の情報（障害の程度や配慮事項、会話が可能かどうか等）を参加者本人や保護者に確認し把握すること、講師との情報共有の徹底（参加者の情報、知的障害についての基本的な知識の確認、講義形態、講義資料の内容や量の確認、スタッフの立ち位置等）、広報の見直し（他機関への発信、SNSの開設等）が必要であることが示された。

**キーワード** 知的障害 生涯学習 オープンカレッジ 実践上の課題

## I. 問題と目的

知的障害者の生涯学習の機会を保障することは重要であり、我が国が2014年1月に批准した「障害者の権利に関する条約」においてもその必要性が述べられている。しかしながら、我が国ではその機会が十分に保障されているとはいえないのが現状である。その背景として、廣森・山内・石岡・加藤・工藤（2010）は、以下の2点を挙げている。すなわち、①知的障害者は障害特性や社会的環境などから生涯学習に関する情報が届きにくいこと、②学習に参加するためには学習方法や内容についての支援が必要であること、である（廣森ら、2010）。こうした現状を改善するため、様々な大学において、知的障害者のアクセスしやすさ、学習方法や内容に配慮したオープンカレッジが開講されている。

筆者らは、知的障害者と健常の大学生を対象としたオープンカレッジ「杜のまなびや」（以下、本事業）を開講している。本事業は、知的障害者の生涯学習を支援する取り組みであり、知的障害者の学習ニーズを探りつつ、大学の持つ専門性を活かした学習プログラムの提供と援助方略を模索すること、そして受講生の意識変容を探ることを目的としてい

る（川住・田中・細川・菊池・李，2007）。また、知的障害者の学び及び学びの場を保障することに加え、オープンカレッジを実践的研究の場と捉え、効果的な学習プログラムの開発および受講生の意識変容に関する研究を進めてきた。しかしながら、取り組み開始から10年を経て、いくつかの課題が生じてきた。スタッフの大幅な減少（また、それに伴い事業実施日程の確保が極めて困難になったこと）という実施体制上の問題や、知的障害者と大学生が対等な立場での共同学習を掲げているものの、実際には大学生が知的障害者を援助するという援助－被援助の関係性になりやすいといった実践場面における課題が挙げられた（野口，2018）。

上述の課題を踏まえ、本年度からの新たな取り組みとして、外部の講師に依頼をして座学以外の講義形式（講師による実演や体験の重視）を採用したり、知的障害者と大学生が対等な立場で学べるように講義内容を生活に即した具体的なものにした。それにより、従来にはなかった実践上の課題（講師依頼における手続き上の問題や実践当日における課題）がいくつか生じた。それらを整理し報告することは、今後の知的障害者への生涯学習支援を実施する上での重要な資料となり、生涯学習支援の充実の一助となるだろう。知的障害者への生涯学習支援あるいはオープンカレッジについての先行研究においても、実施体制上の問題（人材・財源の確保等）や機関連携に関する課題についての報告が散見される（例えば、廣森ら，2010）。しかしながら、先行研究のほとんどが実践報告（例えば、樋田・山田・打浪，2016）や実態調査（例えば、烏雲・今枝・菅野，2013）であり、実践上の課題について報告しているものは少ない。そこで、本研究では担当講師および運営スタッフへのインタビュー調査を通して、本事業の実践上の課題を明らかにすることを目的とした。

## II. 方法

### 1. 対象者

担当講師2名（学内の講師と学外の講師）と運営スタッフ4名の計6名

### 2. 調査内容

本事業の企画・準備段階、実践当日、実践後においてどのような課題が生じたか、どのように解決すべきだと思うかについて質問した。実践当日の感想や参加者の様子についても、対象者の語りに応じて詳細に尋ねた。

### 3. 調査方法

対象者1名につき15分から30分程度の半構造化面接を実施した。面接の際には、ICレコーダーによる録音と調査者による筆記記録を行った。音声データから逐語録を作成し、逐語録と筆記記録を分析対象とした。インタビューが困難な者に対しては、メールでのやり取りを分析対象とした。なお、本研究は東北大学大学院教育学研究科研究倫理審査委員会の承認を得た上で実施した（承認ID：19-1-036）。

#### 4. 分析方法

佐藤（2008）の質的データ分析法を参考に分析を行った。分析対象のデータの中から、本事業における実践上の課題についての言及を抽出し、内容ごとに分類した。また、それに対する改善案についても同様に整理した。

### Ⅲ. 結果と考察

対象者の言及を内容別に分類したところ、8つのカテゴリーに分類された。すなわち、①講義内容の選定、②外部講師への依頼、③参加者の情報不足、④講師との情報共有不足、⑤当日の講義の流れ、⑥講義資料、⑦実践当日の支援、⑧ボランティアの不足である。各カテゴリーの具体的な言及例と改善案についての言及を Table 1 にまとめた。なお、Table 1 の実践上の課題と改善案は同一対象者による言及であり、対応している。以下では、各カテゴリーについての言及を詳述し、その解決策について考察した。

#### ①講義内容の選定

講義内容の選定について、「参加者が楽しめるテーマを探すのが難しい。」といった言及がスタッフからあった。この改善案として、「本年度の事後アンケートの活用」や「実際にスタッフが事前に工作や実験をやってみてから決める。」ことが挙げられた。本年度は参加者の固定化を防ぐため、新たに知的障害者を多く雇用している会社に依頼し参加者を募った。参加者が毎年同じであれば、ニーズの把握や参加者の特徴等からテーマの選定が可能だが、情報が少ない中で選定することの難しさは、本年度から新たに生じた課題であると考えられる。先行研究で報告されている講義内容は、多くが学習や知識の獲得というよりレクリエーションの要素が強いように思われる（例えば、廣森・山内・中堀・工藤，2007）。それに対し、本事業は大学の専門性を生かした学習プログラムの提供を目的の1つとして掲げている。今枝・菅野（2016）によると、学習内容の決定には学習者の基礎的学習能力を踏まえつつ、具体的思考の獲得を目的とすることが必要である。講義内容の選定においては、本事業の目的を踏まえつつ、事後アンケートや過去のデータ、先行研究を参考にしながら決定する必要があるだろう。

#### ②外部講師への依頼

本年度は大学の教員だけでなく、学外の方に講師を依頼した。それについて、スタッフより「外部に依頼したことがなかったため、直接交渉を行わなければいけなかった。何をするような手順で、どういう形で行うべきかが全く分からず、依頼書や計画書、企画書の作成等もノウハウが全くない状態だった。スケジュール管理も難しかった。」との言及があった。講師からも「謝金を含めた条件を最初に提示してほしかった。」との言及があっ

Table 1. 「杜のまなびや」における実践上の課題とその言及例および改善案

実践上の課題	言及例	改善案
①講義内容の選定	参加者が興味をもつテーマを選ぶのが難しい。	事後アンケートでニーズの調査
②外部講師への依頼	外部講師への依頼は初めてだったため、依頼書や計画書、企画書の作成など、全くノウハウがない状態で進めたため大変だった。スケジュール管理も難しかった。	
③参加者の情報不足	参加者の中に自分の名前を書けない人がいた。 集団で会場に向かったにもかかわらず、途中で迷子になった参加者がいた。緊急連絡先として保護者の電話番号は把握していたが、本人との連絡手段がなく、結局その参加者は参加できなかった。 講義の際、突然トイレに行った人がいた。講師との打ち合わせ時にそういう人がいるかもしれないと伝えておけばよかった。	応募資格の設定 事前に参加者の情報・配慮事項を確認
④講師との情報共有不足	参加者の情報が少なかった。講師としては、対象がどのような人か気になる。情報があればもっと準備しやすかった。 講師が多忙で打ち合わせ時間を十分に取るのが難しかった。	参加者の情報を保護者等に確認 早めに依頼を完了させる
⑤当日の講義の流れ	初対面で緊張している人が多かった。	最初にアイスブレイキングをする
⑥講義資料	文字が多くわかりにくかった。	文字よりも絵やイラストを多用
⑦実践当日の支援	参加者の知らないテーマだと、伝えるのが難しかった。 場を盛り上げようと努力したが、適切な支援か迷った。参加者にどう支援すればいいかわからなかった。	どうすれば知的障害者にも伝わりやすいかを検討し、事前に講師と確認 スタッフに対するフィードバックの時間や方法の検討
⑧ボランティアの不足	大学生のボランティアにもっと参加してほしい。	広報の改善 (SNS、他機関へ発信)

た。外部への依頼は前例がなかったために、謝礼の額や扱い等は相談しながらの交渉となつてしまい、条件の提示が遅れたことは運営側の不備である。必要書類の作成やスケジュール管理については、本年度の資料をマニュアルとして保存することで来年度以降の効率化を図ることができるだろう。しかしながら、講師への謝礼については今後の検討課題である。廣森・山内・西村・渡邊・石岡・加藤・工藤（2011）は生涯学習支援の現状と課題について、人材や財源の確保が難しくボランティア的な活動が多いことを指摘している。本年度は、外部講師への謝礼の支払いはしたが学内の講師にはしていない。今後も本事業を継続していくためには、講師や運営スタッフ、ボランティアに対する金銭的な問題についても検討しなければならないだろう。

### ③参加者の情報不足

参加者の情報不足については、「集団で会場に向かっていたにもかかわらず途中で迷子になってしまった参加者がいた。」「講義の際に、突然トイレに行ってしまった人がいた。」等の言及があった。講師からも「講義の際に自分の名前を書けない人がいた。」との言及があった。本事業では応募要件として「ひらがなの読み書きができる」ことを設定している。また、配慮事項を事前に運営スタッフに伝えるようお願いしていた。しかしながら、今回の調査により不十分であることがわかった。知的障害者の中には文字が書けても会話の難しい人もいるし、新しい環境に緊張してしまい普段は書けるにもかかわらず書けなくなってしまう人もいるかもしれない。薬師寺・大手・奥山・坂手・高須・中尾・永瀧・原本・春名（2017）は、オープンカレッジの後に視力の弱い人から「資料が見にくかった」との指摘を受けたことや、「講義のペースやルビの抜け」を実践後の課題として報告している。ただし、事前に参加者の情報をできるだけ多く把握する必要性を述べているものの、具体的にどのような情報が必要かという点にまでは言及していない。本研究の対象者は、（1）障害の程度（特性）、（2）コミュニケーションのレベル（会話が可能か）、（3）文字の読み書き、（4）配慮事項、（5）普段働いているか（働いているとしたらどのような仕事をしているか）といった情報が必要であると述べていた。次回以降は、上記の情報の収集を徹底する必要がある。

### ④講師との情報共有不足

講師2名から、「事前に参加者についての情報がほしかった。もっと情報があれば講義資料の作成や当日の内容も考えやすかった。」との言及があった。「③参加者の情報不足」とも重なるが、今回は運営スタッフも講師も参加者についての情報が足りなかった。また、スタッフより「学内の先生に頼むにしても、学外の先生に頼むにしても、先生方の忙しさから打ち合わせの時間を取りにくかった。」との言及があった。薬師寺ら（2017）では、講師との打ち合わせ事項について、講義内容や時間配分、資料のルビふり、受講生の特性について挙げており、受講者情報や内容の変更・追加がある場合には随時連絡することが必要であると述べている。打ち合わせだけでなく、メール等を使用してこまめに情報共有をし、実践当日には開講前に参加者情報やスタッフ

の立ち位置、配慮事項について確認することを今後は徹底しなければならない。

### ⑤当日の講義の流れ

スタッフの感想の中で、「参加者全員が初対面だったために、かなり緊張しているように見えた。自分が率先して発言し、笑える雰囲気作りを心がけた。」との言及があった。本年度の講義では最初に講師の紹介はあったものの、全体でのスタッフの紹介や参加者同士の自己紹介の時間は設けていなかった。それについて、講師からも「コミュニティを作る時間というのも必要かもしれないね。グループごとでアイスブレイキングをして自己紹介したりとか。それにより、お互いの学びの効果が上がってくると思う。」「スタッフを紹介しますと言って、紹介するといいかもかもしれませんね。ボランティアで来ている誰々ですってことでも良い。」との言及があった。従来は参加者が固定していたため同窓会のような雰囲気の中で活動できていたが、本年度からは新たな参加者を募ったことで例年よりも緊張感が強かったのかもしれない。今後も新たな参加者を募集するのであれば、緊張をほぐすような環境設定、講義形態の見直しは必要である。こうした観点についても、講師との打ち合わせの際に確認し合うことが重要である。

### ⑥講義資料

講義資料については、「枚数も文字も多くてわかりにくかった。」「ルビはあったが使用されている言葉自体が難しかったために、理解できていない参加者がいた。」との言及があった。参加者のアンケートにも、「資料が難しかった。」との記述がみられた。資料を作成した講師からは、「文字が多かった。もっと絵やイラスト、動画を使用して視覚的に理解を促した方がよかった。」「参加者の情報が少なかったために、資料作成が難しかった。」との言及があった。薬師寺ら(2017)でも、講義資料について視力の弱い参加者から「見にくかった」と指摘があったことを記述している。障害特性により資料が見えなかったのであれば参加者についての情報不足が原因であるが、どのような内容でどれくらいの分量なら適切かということは参加者によって異なるため、難しい問題であると考えられる。講師からも「例えば数値やグラフを見せたとしても、参加者が数をどれくらい理解しているかわからない。」との言及があった。その改善案として「過去の講義資料と参加者の感想等を分析し、どれくらいの分量が適切かを検討してみてはどうか。」との助言を得た。今後の研究課題として検討を進める必要があるだろう。

### ⑦実践当日の支援

実践当日の支援(教え方やかわり方)については、講師とスタッフ双方から言及があった。講師からは「参加者の知らないテーマだと伝えるのが難しかった。」との言及があった。この講師は知的障害者に対する講義が初めてであり、話し方や教え方が難しかったと述べていた。その改善案として、「どのような話し方をするとわかりやすいのか、講師に対する事前の研修のようなものがあるといい。」との言及があった。もう1人の講師は大学時代に障害について専門的に

学んでおり、上記のような困難さは感じなかったようだが、「障害者と接したことのない人は障害者の特徴をどう受け止めるのか知っておいた方がいい。（実践当日に）応用を利かせて相手に合わせてやるのはかなり難しい。」と述べている。以上を踏まえると、講師との打ち合わせの際に参加者の情報だけでなく知的障害に関する基本的な情報についても確認した方がよいかもされない。

スタッフからも、「どう支援すればいいのかわからなかった。」「適切な支援だったか迷う部分があった。子ども扱いになっていたかもしれない。」との言及があった。廣森・山内（2009）の調査でも、生涯学習支援活動に参加したボランティアの多くが「受講生とどのようにかかわればいいのかわからず困った」と回答していた。従来から障害者との接触における不安や抵抗感が障害者差別や偏見の背景要因の1つと考えられ、それらの低減について検討されている（例えば、河内，2004）。本事業はインクルーシブ教育の発信や受講生の意識変容も目的の1つとして掲げており、どうすれば知的障害者との接触における不安を低減させることができるのかについては、今後の研究課題となるだろう。自身の支援に不安を覚えていたスタッフからは、「実践後に参加者から（自身の進行を）褒められたことで安心し、やってよかったと思えた。講義の最後に全員で感想を言い合えるような時間があってもよかった。」との言及があった。今回の実践では、時間の都合上、講義の最後に参加者とスタッフが活動を振り返ったり感想を言い合ったりする時間を設けていなかった。また、事後アンケートでは講義内容や講師に対する感想は尋ねていたが、スタッフに対する意見や感想は尋ねていなかった。スタッフやボランティアにもフィードバックできる時間や方法についても検討することで、不安の低減につながるかもしれない。

#### ⑧ボランティアの不足

スタッフより「大学生のボランティアにもっと参加してほしいかった。宣伝広報が不十分だった。今回は募集期間が短かったし、HPやチラシに応募の締切日が書かれていなかった。また、掲示用のチラシが目立たなかった。」との言及があった。例年に比べて本年度のボランティアが少なかった原因は、上記の通りであると考えられる。講師からも「論文も含めて（活動を）発信することがとても大事だと思う。」との言及があり、改善案として「SNSの開設や他機関への情報発信」が挙げられた。特に、大学内のセンターや他の研究室と連携したり、他大学に対しても情報を発信したりすることが改善につながると考えられる。こうした広報活動の見直しや、②で述べたような謝礼等の支払いについて検討することにより、ボランティア不足の解消につながるだろう。

#### IV. 総合考察

本研究では、「杜のまなびや」における実践上の課題を明らかにするために、担当講師と運営スタッフを対象とした半構造化面接を行った。その結果、8つの課題が明らかとなった。すなわち、①講義内容の選定、②外部講師への依頼、③参加者の情報不足、④講師との情報共有不足、

⑤当日の講義の流れ、⑥講義資料、⑦実践当日の支援、⑧ボランティアの不足である。今後実践を行う際には、参加者の情報（障害の程度や配慮事項等）を把握すること、講師との情報共有の徹底（参加者の情報、知的障害についての基本的な情報の確認、当日の流れ、講義資料の内容や量の確認、スタッフの立ち位置等）、広報の見直し（他機関や他研究室への発信、SNSの開設等）が必要である。

知的障害者への生涯学習支援やオープンカレッジに関する先行研究では、実践報告や実態調査がほとんどであり、実践を通して明らかとなった課題についてはほとんど報告されていなかった。本研究では本事業の実践上の課題に焦点を当て、それぞれの解決策についても対象者の語りと先行研究から検討した。本研究の知見は、今後知的障害者への生涯学習支援を行う上での重要な資料となり、生涯学習の充実に寄与するものと考えられる。ただし、今回の調査だけでは解消しきれなかった課題がいくつか存在した。例えば、講義資料の適切な内容や量の選定方法、知的障害者とのかかわりに対する不安の低減方法等である。こうした課題についても、今後さらなる検討を進める必要があるだろう。

最後に、本研究の限界点と今後の課題について述べる。本研究では講師とスタッフを対象とした調査を行ったため、運営側の意見しか捉えられていない。参加者である知的障害者やその保護者、学生ボランティアに対する調査を行うことで、より本事業の課題が明確になるだろう。知的障害者を対象とした事後アンケートでは、「楽しかった」「また参加したい」といったポジティブな回答が多かった。本研究では課題に焦点を当てたが、本事業のよかった点についても調査することで、講師やスタッフの意欲向上につながったかもしれない。ただし、こうしたアンケートは様々なバイアスから評価がポジティブな方向に歪みやすいのが特徴である。また、障害特性により自身の考えを表現することが難しい人もいるかもしれない。今後は調査対象者や方法を検討し、多様な意見を反映させることで、本事業だけでなく知的障害者への生涯学習支援の充実につながると考えられる。

## 付記

本研究は東北大学大学院教育学研究科先端教育研究実践センター地域教育支援部門生涯学習支援事業（事業代表：野口和人）によるものである。

## 文献

廣森直子・山内修・中堀久子・工藤睦美（2007）青森県における知的障害のある人の生涯学習活動の現状と課題—受講生調査から—。青森保健大雑誌，8，245-254。

廣森直子・山内修（2009）知的障害のある成人の生涯学習活動におけるボランティアの学び—「オープンカレッジ in あおもり」における実践から—。青森保健大雑誌，10，17-26。

- 廣森直子・山内修・石岡れい子・加藤和仁・工藤睦美（2010）知的障害のある人の生涯学習の保障における学校の役割—青森県の特別支援学校における青年学級調査から—。青森保健大雑誌, 11, 67-76.
- 廣森直子・山内修・西村愛・渡邊洋一・石岡れい子・加藤和仁・工藤睦美（2011）知的障害がある人の生涯学習を支える地域ネットワークづくりの展開と課題—青森市における取り組み—。青森保健大雑誌, 12, 53-62.
- 今枝史雄・菅野敦（2016）成人知的障害者の生涯学習支援で取り組まれる学習内容と基礎的学習能力との関連。特殊教育学研究, 54, 145-155.
- 河内清彦（2004）障害学生との交流に関する健常大学生の自己効力感及び障害者観に及ぼす障害条件—対人場面及び個人的要因の影響—。教育心理学研究, 52, 437-447.
- 川住隆一・田中真理・細川徹・菊池武剋・李仁子（2007）知的障害者の生涯学習支援に関する研究—オープンカレッジの試みを通して—。東北大学大学院教育学研究科教育ネットワークセンター年報, 7, 91-93.
- 野口和人（2018）東北大学オープンカレッジ「杜のまなびや」。先端教育研究実践センター年報, 19, 131-134.
- 烏雲畢力格・今枝史雄・菅野敦（2013）成人期知的障害者の生涯学習支援の“ねらい”に関する研究—障害者青年学級・特別支援学校（青年学級・同窓会）・オープンカレッジにおける実態調査を通して—。東京学芸大学紀要総合教育科学系, 64, 327-340.
- 佐藤郁哉（2008）質的データ分析法—原理・方法・実践—。新曜社.
- 樋田幸恵・山田修平・打浪文子（2016）知的障害者生涯学習支援事業の課題と展望—社会福祉士・保育者養成機関での実践から—。淑徳大学短期大学部研究紀要, 55, 17-35.
- 薬師寺明子・大手裕美子・奥山祐可・坂手菜央・高須将裕・中尾彰太・永瀧良子・原本侑季・春名翔太（2017）実践報告「オープン・カレッジ“きんちやいみまさかれっじ”」。美作大学・美作大学短期大学部紀要, 62, 63-72.